

思ひ草

國學院大學人間開発学部教育実践総合センターだより

第12号

平成25(2013)年12月5日 発行

「人間(じんかん)力」を学ぶ ～長期宿泊体験便り～

人間開発学部長 しんとみ やすひさ 新富 康央



人間開発学部では、毎年9月中旬、1年生全員で3泊4日の長期宿泊体験研修に行きます。昨年までは、国立妙高少年自然の家。今年からは、新学科(子ども支援学科)設置に伴う参加者増で、国立中央青少年交流の家(御殿場)です。学生たちは今年も、たくさんの「お土産」を持って帰りました。お土産とは、合宿体験からの貴重な学びです。3つに要約できます。

(1)「生きる力」の育成です。「生きる力」の育成が今日、問われています。それは、「知・徳・体」の3つを指します。「知」は、進んで学ぶ意欲。「徳」は、相手を思いやる心。そして、「体」は、自らの生活や健康を自己管理する力です。

この宿泊研修では、とりわけ「体」が課題となります。少なくとも数日前から身体慣らしが必要です。ところが、若さ故の自信からか、それを怠り、体力不足を露呈する者も出ます。日頃は、健康管理など関心が無くても生活はできます。食事についても、フライドポテトしか皿に盛ることができない者もいます。しかし、体力勝負の合宿研修の場では、そうは行きません。

(2)「人間力」の構築です。一般に、

「にんげん力」と読みますが、私は敢えて、「じんかん力」と読みます。私たちは、人間関係づくりから、生き方を学びます。気付いていなかった自分の「よさ」だけでなく、友達の「よさ」も見つけます。

大学生にもなって、と思われるかもしれません。しかし、人的交流の希薄な今日、宿泊研修での非日常的な生活を通して、彼らは「自分探し」をします。それは、人と人との間を取り結ぶ「じんかん力」となります。突然の豪雨の中で滑り落ちる仲間を助け合いながら下山した体験など、お土産は豊富です。

(3)「ツーリストではなく、トラベラーズへ」です。ツーリストは、指示されるままに動く、修学旅行などの団体旅行客です。それに対して、トラベラーズは、一人一人が個々の思いや願いを持って参画する旅行者集団です。「人づくりのプロ」養成を目指す本学部では、指導者としての指導力、人間関係構築力などの「主体性能力」を、こうした体験活動を通して学びます。

共育フェスティバルを終えて

教育実践総合センター副センター長 たかやま まこと 高山 真琴



去る10月27日に開催された國學院大學人間開発学部第5回共育フェスティバルでは、参加学生たちが「学びと遊びのコミュニティキャンパス」をモットーに、日頃の活動や学びの成果を当日のプログラムに結集させました。理科系の実験や工作にはじまり、人形劇や音楽会、運動遊びに歩き方チェックなどその内容は多種多様で、台風一過の秋晴れの一日、たまプラーザキャンパスは、フェスティバルを楽しむ多くの方で賑わいました。

日頃から人間開発学部の学生たちは、教育実習や教育インターンシップ、ボランティアなどの教育実践を行うため、積極的に地域に出ています。教育の現場に自ら赴くことで、大学での学びと現場での体験的な学びをリンクさせ、教育について、そして子どもについての理解を深めていきます。共育フェスティバルは、そのように地域に育てられている学生の学びの成果を地域の方々にご覧戴くよい機会であったと同時に、学生にとっては、子どもたちへの臨機応変な対応が求められる、まさ

に指導案無き教育実践の場となりました。

後日、各企画の活動報告書に目を通した時、子ども支援学科の学生が担当した企画の反省点には、環境が子どもにとって最良ではなかったことが示され、その改善方法には、子どもの立場になって考えた、環境を整える術が幾項目も記されていました。学科が産声を上げてわずか半年ですが、学生たちは既に保育者としての目で子どもたちを見つめるようになっていくことに頼もしさを覚えます。しかし、そのような視点をもち得たのは、子どもたちの存在があったからこそであると、実践的学びの大切さを改めて気付かせてくれた共育フェスティバルでもありました。

今年から人間開発学部は、初等教育学科、健康体育学科、子ども支援学科の三学科体制となりました。共に育み合い、共に響き合いながら自己の可能性を拓いていく学生たちを、これからも心から応援していきたいと思ひます。

教育実践総合センター事業の主な取り組み

本センターは、「教育」「研究」「社会貢献」の三分野における実践研究指導センターとして、教育インターンシップや教育実習等の支援を主に行う「学生支援領域」と、地域の教育関係諸機関や現職教員との連携の支援を主に行う「地域教育支援領域」について行っています。

教育実習

学校現場での実習から多くのことを学びました

平成25年度教育実習を終えて

人間開発学部 教授 上口 孝文

平成25年度の実習も、健康体育学科の4年生が前期に、初等教育学科の3年生が後期に終了した。

教育実習は、教員を目指す学生一人一人が、自らの人生をかけて人を育てるという、やりがいもあるが、困難と、児童・生徒の将来に大きな責任を伴う教員という職業に向いているかどうかを見極める期間であり、卒業後の進路にも大きな影響を及ぼす期間でもある。教育実習を境にして進路を変更する学生も少なくない。

健康体育学科の1期生で、ルールの学生であったH君には入学後早い時期から、君は教員に向いているから教員を目指したらと勧めてきたが、本人は「自分は他人を指導することは苦手で、教員には向いていないと思います。健康体育学科で学んだ証として教職の資格は取得しますが、公務員か企業の採用試験を受けます」と言い続けてきた。実際、いくつかの都道府県の警察と企業の採用試験を受けた後、教育実習に赴いた。実習を終え、大学に帰ってくるといきなり「先生、めちゃくちゃ楽しかった。進路を変更して教員を目指します」と、満面の笑みを浮かべながら報告してきた。話を聞いてみると、人を育てることの大切さと魅力、生徒たちと触れ合うことの楽しさ、実習校の校長先生の強い勧めがあったなどと輝いた表情で述べていた。特に校長先生からは、私が支援し、協力するから君は教員になるべきだと言って頂いたらしい。ご指導頂いた指導担当の先生、自分たちの後継者育成をなさろうとされる校長先生の熱意と、H君の人柄と教員としての資質を見出して熱心に勧めて頂いたことに感謝の言葉しかないが、教員採用試験の日程は目の前に迫っていた。その時点では、当然のことながら教員採用試験の準備はしていない。「採用試験まで死に物狂いで頑張ります」という本人に、「今年度は準備不足で受かる可能性は少ないので時間をかけて準備をしよう」と言ったことを思い出している。予想通り現役での合格はなかったが、先般、「1年間頑張る、合格し

ました」という嬉しい電話を頂いた。来春4月から専任教諭としてスタートするH君の成長と、後輩諸君の採用試験までの努力に期待をしたい。

教育実習で心に残ったこと

健康体育学科 4年 星田 冬樹

「99%の苦勞と1%の喜び、その1%の喜びに幸せを感じることができれば教師として適任だよ。」

教育実習最終日に、実習先の先生がおっしゃったこの言葉は、私が教師になることを決意する言葉となりました。私は母校である岐阜県養老町の中学校で教育実習を行いました。今回の教育実習で私が1%の幸せを感じた場面を紹介します。

体育の研究授業でのことです。研究授業は、中学3年生男子の跳び箱授業を行いました。前日は夜遅くまで担当の先生が付き合ってください、何度も指導案を書き直し、何度も模擬授業を繰り返しました。

研究授業当日、実技の際に挑戦してもなかなか跳び箱を跳ぶことができない生徒がいました。そこで、指導案作成時に考えていた「技能に合わせて跳び箱の段数設定をする」「着地位置をビニルテープで分かりやすく示す」等の指導方法を試すことにしました。また、褒めたり励ましたりすることで挑戦しやすい雰囲気を作るなど、生徒が少しでも達成感や自信を得られるように様々な働きかけを行いました。

気がつくと、その子の周りにはクラスのみんが集まって応援をしていました。そして、ついに跳ぶことができました。苦勞の上に成り立った授業の中で、仲間と共に成長していく生徒の姿に喜びと感動を覚えました。授業内容や成果としてはまだまだ多くの反省点がありましたが、事前の準備の大切さや教師の仕事の素晴らしさを実感した瞬間でした。

私は多くの方に支えられ、教育実習では充実した日々を過ごすことができました。教育実習は生徒や先生方と共に学び合い、成長できる最高の機会です。今回の経験を心に刻み、子どもの笑顔のために努力を惜しまない教師でありたいと思います。

教育実習

学校現場での実習から多くのことを学びました

教育実習 ～授業づくりを通して学ぶ～

初等教育学科 3年 前田 亜里沙

私は母校である、青森県弘前市立和徳小学校で教育実習をさせて頂いた。担当は3年生であった。とても充実した4週間で、多くのことを学んだ。私はその中でも特に机間指導・計画指導の大切さ、信頼関係を築くことの大切さを実感した。

まず一つ目に机間指導・計画指導の大切さである。今まで机間指導は問題を解けずにいたり、わからずに手が止まったりしている児童に声をかけをすることが主な目的だと思っていた。しかし、それだけではなく、どんなことを書いているのかを見てあらかじめメモをしておき、意図的に指名をするということも大きな目的であると気づいた。普段の授業の中で手を挙げない子もいる。その時に机間指導をしていたことが活かされるのである。ただ手を挙げた児童にだけ指名をするのではなく、一人一人の考えをしっかりと理解した上での指名が大切だと感じた。

また、計画指導では、日頃から授業の感想を書くことの大切さを学んだ。日頃から授業終わりに感想を書かせることで、例えば国語であれば、主人公の気持ちをどう考えて

いるのか、この考えだったのにこういう考えに変わったという考えの変化も知ることができ、それをもとに授業で子どもたちの意見がより活きるような授業ができると実感した。感想を表にして計画をしながら指導するというテクニックを学ぶことができた。

二つ目は、信頼関係を築くことの大切さである。授業だけではなく、休み時間にたくさん児童と遊んだ。遊びの中では、授業中ではわからない子どもたちの様子を知ることができ、人間関係も知ることができる。遊びを通して話をしたり、友達を傷つけるような発言を注意したりするなど、その活動の中で信頼関係を築くことはとても重要だと感じた。

教師の仕事は決して楽しいことばかりではない。しかし教師が子どもたちのために一生懸命考え、声かけしたことは、信頼関係が築けていれば、児童に伝わるということを実感した。教育実習を終えて、教師になりたいと改めて思うようになった。教育実習での経験を忘れず、教員採用試験の勉強を頑張っていきたい。

教育インターンシップ

先生方や子どもたちの姿から多くのことを学びました

教育インターンシップでの貴重な経験

健康体育学科 3年 松村 寿春

教育インターンシップとして実際に現場で子供たちや教員の方々と関わりを持つことは実践的な経験を積む貴重な機会です。開始させていただいてから、まだ日は浅いですが普段の学校生活をはじめ特別活動としての運動会、特別支援学級のバスケットボール大会などの教育活動を通じて子供たちの変化を感じ取ることはもちろん、教員としての立ち居振る舞いや言葉使い、教材の工夫など現場でなければ学べないことがたくさんあります。印象に残っているエピソードをひとつ紹介します。ある日の喧嘩が起こったことです。特別支援学級で、中学第一学年の男子生徒同士が、帰りの会終了直後に口論から喧嘩をはじめました。仲裁に入った先生はおそらく一部始終を目撃していました。

しかし、あえて双方の言い分に耳を傾け内容を整理して

いました。頭ごなしに悪いほうを怒るのではなく、言い分を聞き内容を整理することで「なぜこのような喧嘩が起きたのか」「喧嘩になる前に解決できる糸口はないのか」ということを当事者二人に気づかせていました。このときの指導を目の当たりして、私ならどんな対応をしようか1日中考えさせられるという体験をしました。これは私が体験したほんの一部ですが、毎日新しい学びが実際の教育現場ではできます。

さまざまな活動を通し子供たちとともに自分自身も成長できる教育インターンシップは素晴らしい活動です。理論と実践が伴う教育インターンシップは教員を目指す上で大切なステップだと思うので、是非多くの方に活用していただきたいと思います。

教育ボランティア

地域活動の体験から学んでいます

つくり上げる ～新石川小学校「夕涼みの会」の活動を通して～

初等教育学科 1年 高橋 正人

「子どもたちだけでなく近隣の多くの方々が毎年この祭りを楽しみにしています。協力して素晴らしい夕涼み会を作り上げましょう。」新石川小学校の代表の方の一声で夕涼み会の準備は始まりました。

お手伝いをするPTAの方々と学生の生き生きとした顔を見ると、「素晴らしい会に必ずなるだろう」と思わずにはいられませんでした。それに伴って子どもはもちろんのこと、近隣の方々やOB、OGまでもが楽しみにしているこの会を絶対に成功させなくてはならないという責任感も感じました。

私はホットドック作りをお手伝いさせていただきましたが、自分で作ったホットドックを直接子ども達に手渡して、「ありがとう。お兄ちゃん。」と言ってもらった時の喜びは忘れられません。

夕涼み会を無事成功させ終えることができましたが、私はこの体験を通じて「つくり上げる喜び」を経験することができました。初めてのボランティアでこのような大イベントを「つくり上げる」一員として成功できたことを大変嬉しく思います。



共育フェスティバル

地域の子どもたちとのかかわりから学んでいます

10月27日(日)、人間開発学部第5回「共育フェスティバル」を開催しました。今年度から教育実践総合センターも積極的に関わることになりました。

当日は、学生企画委員が主体的に運営し、800名以上の参加者がありました。

子どもたちと関わり交流することを通し、学生にとって実践的に学ぶことのできるよい機会となりました。

